

# 戦争孤児と戦後 沖縄～満洲～沖縄

## かわみつけいせい 川満恵清さんのお話

本文の話者である川満恵清さんは、昭和8年8月2日、宮古島の狩俣<sup>かりまた</sup>で生まれている。

2019年歴教協「沖縄本島と宮古島を訪ねる旅」、12月25日くすぬち平和文化館でのご本人のお話（息子・彰さんのインタビュー）に、「戦争孤児たちの戦後史1」II部第3章「沖縄の戦争孤児」（川満彰著）より補足、更に彰さんに補足修正していただきました。（漢数字は算用数字に変更・一部省略）



44 フミさんと恵清さん（2019年筆者撮影）

「戦争孤児たちの戦後史1」より

日本政府の満洲移民500万人計画は、沖縄では1939年から「10ヵ年3万戸移民計画」として進められた。村単位の分村計画も進められたが、多くは集落の中でも貧しい人々が、広大な土地を求めての移住計画だった。

宮古島の最北端<sup>かわみつけいせい</sup>にある狩俣集落では、23世帯が新たな居住地を求めて満洲移民計画を進めていた。その中に川満恵可の家族がいる。1941<sup>いひき</sup>年、第9次開拓団の一員となった恵可は、妻の松子と長女のフミ、長男の恵清、次男の恵喜の5人家族で入植した。

### 満洲へ

父が三男で土地がなくて宮古島で食べられなくて、福岡の戸畑に家族で行き、父は鉄工所で労務をしていたが暮らしは全くよくなり宮古島へ帰って来た。

満洲へ向かう1年前に、父は満洲に行っていて、家族を連れに宮古島に戻って来た。当時、私は8歳、姉フミは10歳、弟の恵喜<sup>けいき</sup>は3歳だった。満洲には8～9月頃に出発した。父母と兄弟3人、漁船みたいな船で沖縄本島に着き、人力車に乗ってホテルへ宿泊した。それから日本本土へ渡り、下関から船に乗って大陸に渡り、汽車に乗り、馬車に乗って、指定された集落に着くまでひと月くらいかかった。向こうでは冬になっていた。ものすごく寒く、歩くとつらい、馬車に乗ると手足の先が冷えて、寒いところに連れてきた父を憎んだ。防寒帽や靴も支給されていたが、マスクをして息を吐くとまつ毛が凍るし、マスクを外すと鼻先が痛い。そうしてやっと集落に着いた。

『宮古市史』に、一緒に満洲へ行ったと考えられる大浦カメさんの証言が記述されている。寒さで体が凍り固まったまま降ろされて、ストーブの前でようやくしゃべれる状態だったとか。（彰さん補足）

ハルピンの更に北側の方正県伊漢通地区稲見郷では、親は食糧とかで苦勞をしていたと思うが、靴を履いたまま氷の上をすべったり、そり遊びしたり、夜、キジを探して、キジや鳥が凍え死にしているのを獲りに行った。オオカミのわなは怖かった。

満人の畑を荒らしたり、スイカを盗んで食べたりもした。マクワウリを採って給食のおかずにししたりした。子どもたちは沖縄ではできない遊びを楽しんだ。初めて雪を見たり、素晴らしいところだと感じていた。引き揚げを除けば楽しい思い出だった。

稲見郷の周りは塙で囲まれていて、外側に堀がある。学校は別の場所にあった。レンガの2階建てで稲見郷から距離にして6~7kmのところのところに学校と宿舎があった。1941年12月8日、真珠湾攻撃で大戦果があったと大本営発表があって、勝ったことがあったことだけ知らされていた。集落にラジオは無く、ニュースは先生方の話を聞くのが楽しみになっていた。日本はえらいんだ、強いんだと思っていた。

土曜日に家に帰り日曜の朝学校の宿舎に戻る。あの頃はオオカミが多かった。道中団体でかたまって移動した。

宮古島の人たちは稲見郷から北進郷へ移り住んだ。その2km離れたところに大島の集落があった。さらに2km離れたところに満人の集落があり、その裏に松花江という大きな川が流れていて、両脇に水車みたいなのが付いた船が通っていた。冬は氷が萎縮して爆裂する音を聞いた。地元の人、長い鉄の棒で氷を割って魚を釣って日本人に売りに来た。日本人のタンパク源だった。魚は大豆とかお米とかと交換していた。

## 終戦を知る

1945年になると、フミは召集令状で「父を始め、6月ごろから大黒柱の男たちが、次々と村から姿を消していった」と振り返る。そして8月にソ連軍が満洲に侵攻したことで彼らは捕虜となりシベリアへと抑留された。

残された母松子と6名の子どもたちの逃避行が始まった。極寒の逃避行は過酷で、フミは「歩ける小さい子どもは荷物を持たされ、疲れ切り死んでいった」と振り返る。伊漢通地区はソ連軍に包囲されたことで、郷内（堀で廻らされた集落）で越冬することになった。・・・約6ヶ月間暮らしたという。そして広子（当時2歳）が死んだ。翌年、春の季節とともに何千人の、直線にして1400キロ近い逃避行が再び始まった。・・・ハルピンにたどり着いた時、すでに弟妹の恵喜・美佐子・輝夫も亡くなり、母の松子は病院となった花園小学校で息を引き取った。（彰さん著書引用）

戦争が終わったのは、人づてに聞いて分かった。日本兵が銃を持たず、トコトコ歩いていた。戦争に行くんだと思っていたら、ロシア兵が来て武装解除。ロシア兵は銃剣・日本刀・指輪・腕時計を欲しがった。ロシア兵はボロ服を着ていて日本の将校の服も欲しがった。着替えるけどロシア兵は背が高い、着るとツツルテン、それでもいばって歩いていたことを思い出す。マンドリン銃（ロシア兵が持っている丸い機関銃）を車のボンネットに乗って構えている。日本兵が抵抗するとバラバラと殺す。

## 故郷へ

戦争が終わって逃げないといけない。内地へ帰ろう。持てるもの米とか食べ物をリュックに詰め、背負って歩いて部落を出た。米を炊くには火を焚く。煙が出ると団体の長が嫌がった。だから米は生で食べないといけなかった。ひと月経ってこれ以上は進めないと、元の集落に戻った。集落には何も残っていなかった。他県人も集まっていて、空家が2か所くらいしか残っていなかった。6畳2間に20~30人くらいで暮らした。ときどきロシア兵が襲ってきて女性を連れていく。女性の年齢は関係ない。家を閉じて家の中で煙を出して追い払おうとするが、それでも拉致され強姦され、ほとんどが殺された。どうしようもないと、年配の女性で満洲人の妻になった人もいる。満洲人は日本人は頭が良いと、喜んで嫁にもらった人がいた。

満洲では子ども3人が増えた。逃げる時には姉のフミは15歳、私は13歳、恵喜7歳、美佐子5歳、輝夫3歳で広子はおんぶしたり抱っこしたりして避難した。妹の美佐子は病気で死んだ。夏に死ねば埋められるけど…。下の3人は冬にチフスで死んで、土が凍って掘れない。そのままにするとオオカミに食べられたり、満人が衣類を取るために骨を折ってバラバラにされたりする。若い娘さんもぜんぶ裸にされる。パンツまで脱がされる。そんな惨めな姿を見ているから、お袋は、若い人にツルハシで穴を掘ってもらって、埋めた記憶がある。

1000人近くの団体に避難する時「赤ちゃんは泣かすな、声を出させないようにしろ、見つかるから」という命令がある。親は泣いている赤ちゃんを橋から投げ捨てる。自分の身しか見えていない。道端に置いて親だけ逃げていくということもあった。

伊漢通からハルピンまで、母の松子と姉のフミと3人で歩いた。2カ月くらいかかった。戦後、中国に墓参に行ったが車で5時間くらいしか掛からなかった。当時は2カ月かかった。

ハルピンでは、花園小学校が収容所となっていた。食糧は大豆とトウモロコシの粉。煮るために、日本兵の兵舎の板を取って来て、日本兵の鉄かぶとを鍋にした。鉄かぶとは底の部分が煮えない。そうこうしているうちに、私と姉が病気になり、母はどうやったのかはわからないが、滋養をつけるために食料を調達してくれた。病気が終わるころお袋が病気になり、死んだ。

小学校の防空壕に死体を積んだ。1週間くらいして、馬車に農作業のフォークで突いて載せる。首が落ちたり、手が落ちたりする。どこに運ばれたか分からない。

中国残留孤児に対して親が名乗り切れないのは、子どもを捨てたから、満洲人に売ったから。

## フミと2人だけで引揚げ

ハルピンから日本への引揚げは2回あった。1回目は健康な人、歩ける人。しばらくして、歩きにくい人は2回目だった。沖縄出身の人はいなかったと思う。内地の大人の後を追った。母が死ぬ前にどんなことがあっても日本に帰れと言った。

私は脚気に罹って動けなかったが、私は覚えていないが下半身膨れ上がって動けず、フミが無理やり私の手を引いて、引揚げ用の汽車へ向かった。しかし2番目の汽車は動き出しており、フミが言うには朝鮮人の男の人が目の前に現れて、私たちを抱きかかえて走りながら汽車に投げってくれたという。汽車は無蓋車、屋根がなかったのでそんなことができたと思う。朝鮮人が私たち姉弟を助けてくれた。恵清は脚気にかかっていた。フミさんが泣く恵清をひっぱっていく。

汽車は横になることも座ったままでもスキもなかった。朝になると隣の人が死んでいた。ぎゅうぎゅう詰めなのでわからなかった。そして汽車を降りたり、深さが頭の近くまである川を、頭に荷物を乗せながら渡ったりして釜山に辿りついた。

## 日本へ帰る

そこからアメリカの船に乗せられて、長崎の佐世保沖に着いた。船内で食べたのが、海のり。こんなにおいしいものがあるんだと思った。船団でコレラが流行った。沖に1週間流された。その間にも船内で亡くなる人は海へ流していく。広島の大竹に上陸した。DDTを浴びて収容所へ。イワシの缶詰を食べた。おいしかった。呉まで行ったら沖縄に行く船が出るんだと言われたが、途中で出ないと分かり、名古屋へ行くように言われ、名古屋の収容所に入った。

広島を通った時に、焼け野原で家も何もない。駅のホームでゴザを被って子どもたちが寝ているのを見た。かわいそうだった。何もなかった。あとからあれが原爆だと分かった。広島と長崎には新爆弾が落とされたが、人間はちょっとしか死んでないと先生から聞かされていたが、でも何もなかった。

名古屋の収容所で、従姉の良子さんに会った。とても嬉しく、とても可愛がってくれた。

## 宮古島へたどり着く

私は13歳、姉のフミは15歳で、良子さんに連れられて宮古島に帰ってきた。良子さんにも親がいなかった。良子さんの兄夫婦に引き取ってもらおう。お兄さん夫婦にも子どもがいて、食糧難で大変だった。あの頃は引揚者にアメリカ軍から缶詰とか衣服とかの配給があった。それは全部、良子さんの兄夫婦の所にいった。しかし、それは小さな問題で、私たちを預かってくれたことがとても有難かった。

フミと恵清が宮古島で親戚に引き取られた後、父の恵可はシベリアから帰島。だが、2人を養う暮らしはできず、フミと恵清はそのまま親戚で育てられた。(彰)

その頃は、預かった人から「あっちの農家へ行きなさい、こっちの農家へ行きなさい」と言われたら行かないといけない。あちこち転々とした。働かないといけない。学校に行けなかった。

姉が女中をしていたところで採用され、歯科技工士を目指した。漢字が読めないので、貸本屋でカナが付いている本を借りて、ちょっとずつ覚えていった。人間は恐怖心があると何もかも忘れる。満州の学校で習ったことはほとんど忘れていた。医学書を読んでも分かるまでになった。

宮古定時制高校にそろばん塾の先生に勧められて行くようになった。早く行った人がカヤを掃除してランプを付けた。半年後に歯科医院の先生が沖縄本島に移るといっているので、どうしようかと思ったが、「職」をとって先生についていくことにした。19歳で本島に来て英語も学んだ。

## 中高生に伝えたいこと

一番気にしているのは辺野古の問題。私と同じような戦争をさせたくない。基地を造らせない。基地は真っ先に空襲を受ける。基地を造らせないようにすること。皆さんの力で何とかしてください。沖縄戦は直接知らないが、引揚げの惨めさはよく分かっている。基地を造らせない。その

一点だけ。

## 川満彰さんの補足

### 恵清さんが宮古島に帰って来てからの話

父・恵清は預けられた先で「あっちに行け」、「こっちに行け」と働かされた。いわゆる「口減らし」だった。父は預けられた先で食べさせてもらっていた。

父は、狩俣から平良市まで、ススキの穂で箒を作って、売り歩いていたという。片道約 10 キロ以上である。14～18 歳、朝から晩まで働かされたという。姉のフミさんは嵩原歯科で女中奉公として住み込みで働いていた。フミさんは、弟の恵清はよく泣きに来ていたという。

また、姉のフミさんはハルピンの花園小学校から出ていく時の「あの朝鮮の男の人に会いたい」と今でも振り返る。あの朝鮮の人がいなかったら、二人はいまだに中国にいたはず。母の松子さんが亡くなる時、フミさんは家族の遺髪と爪を肌身離さずに、恵清だけは必ず連れて帰れと言われたという。

フミさんはハルピンの収容所でコークスを拾って売っていた時、自分が盗まれそう（誘拐）になって、逃げて転んで逃げてを繰り返し、右足が短くなっている。

(嶋田由加里さんによる聞き書きを補足修正)